

創造的文化的なコミュニティ形成

標準家族住宅と福祉のまちづくり

渡辺 治 (渡辺治建築都市設計事務所)

戦後 1946 年、GHQ(連合軍最高司令官総司令部)の要請により、日本政府は、1年3ヶ月で1万戸以上の家族用住宅を建設すると同時に¹⁾、GHQは民間へ呼びかけ、基地の周辺で、高家賃の家族用住宅建設を誘導した。建設から50年を経て、安心安全タウンを目指し、IT化も後押しし、家族と仕事を大切に作るクリエイティブな家族が住むコミュニティとして生まれ変わる。

■日本人向けの住まいへの展開

当時の生活の様子を聞くと、若い夫婦はおしゃれをし、文化的な生活をエンジョイしていた。日本人もそうだったように、アメリカ人も、男性が戦争にかり出されていたので、家族をつくれなかったものであり、終戦後は家族をつくる権利と、好きに考え行動に移せる自由を手に入れ、青春を謳歌していたのである。

その一方で、占領される側にあった日本人は、そのようなはつらつとした文化的な生活を日本で楽しむアメリカ人を羨望の眼差しでみていたに違いない。

また、占領体験者によると、当初「占領され」捕虜になったり、殺されたりするのかと不安がっていたが、占領軍が上陸してから、彼らに対する信頼が高まり、感謝と尊敬の念に変わっていったという¹⁾。

GHQのデザインプランチの設計責任者のクルーゼ少佐は、「この企画の建築はアメリカ式の住宅ではないと同時に、日本人にとっては新住居・新生活様式の先駆とみなされ得るものである」と述べており、日本の復興を急速に進めさせるとともに、その後の日本の産業や経済復興に関し

ての原動力となるという前提が含まれていた事は、特筆に値するだろう。

■ジョンソンタウンの進駐軍住宅

入間のジョンソンタウンは朝鮮戦争時に、米軍兵のために建てられたもので、土地所有者の磯野商会²⁾から、吉沢建設の創設者であった、故吉沢誠次が個人で設計施工を請け負った。(図1)生前の吉沢氏は、入間基地内に建設されていた、純正進駐軍(基地内に日本政府が建てたハウス)ハウスを見よう見まねで造ったと語っていた。

また、当時、進駐軍に借り上げてもらうには、水洗トイレ、集中暖房、給排水整備、部屋数などGHQが示す基準をどれだけ満たしているかによって、賃料が決められた。

ジョンソンタウンの当初の建築の特徴は以下のようである。

基礎：I型の番線コンクリート基礎で床レベルを地盤に近づけている

構造：木造在来工法+トラス構造で4間のスパンを持たせている。

平面：3畳のトイレ風呂、10畳のキッチンダイニング、10畳のリビング、2ベッドルーム、ウォークインクローゼット

外装：屋根はコンクリート瓦、外壁は木の下見板に塗装、窓は木サッシの引き戸タイプ

内装：3×6版のベニア仕上げ、床は木フローリング、キッチンが木製の作り付け

排水：浄化槽

暖房：石油ストーブが輸入され、タンクは基地から戦闘機のタンクを譲り受けて設置した。

便器：水栓便器を輸入し、設置。

建築配置：入り口は妻入りで、方位と無関係に、入り口と居間が街路の

方に向き、町並みを構成している。ジョンソンタウンの南には広い公園があるが、居間と入り口をそちらの方を向けている家はなかった。

上記の仕様は、当時の日本の仕様とはかけ離れており、GHQの指定する基準を満たすものだった。日本の独立後は、大部分のアメリカの兵隊は日本から離れ、空き家になった進駐軍ハウスには、独立し自由な表現を許された日本の文化人が住むようになった。細野晴臣(ほそのはるふみ)は埼玉県狭山市の進駐軍ハウスに、村上龍は福生市の進駐軍ハウスに住んでいたことは有名である。

しかし、40年も経つとジョンソンタウンは高齢化、老朽化が進み、私たちが関わる頃には、「磯野スラム」と呼ばれるようになり、家賃は、1軒で2万前後であった。(2004年の時点)

■これからの標準住宅づくり

もし、GHQが現代に進駐軍住宅(復興住宅)を日本で考えるとしたらどのような価値観でつくるかが論議された。つまり、これからの日本の住宅はどうあるべきかが論点とされた。

新たな標準住宅として、住み続けられるまち：高齢者や障害者にやさしいバリアフリーの「安心安全タウン」、介護しやすい住宅(図2)、環境負荷が少なく、生活環境重視の家づくり：床暖房、2×4材を使った屋根、内装にはベニアが発展してきたOSB(Oriented Strand Board: 間伐材などで作られる環境を壊さない構造用合板)が使われた。

これらの考え方は、ホームページ上で公開され、これに共感したとして、最初に居住者として名乗りをあげたのは、映画監督であり音楽家であ

関連ページ
第1部：III-2
キーワード
進駐軍住宅 標準住宅
安全安心タウン
テーマ型コミュニティ

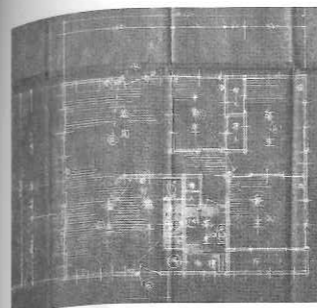


図1. 吉沢氏による当時の図面

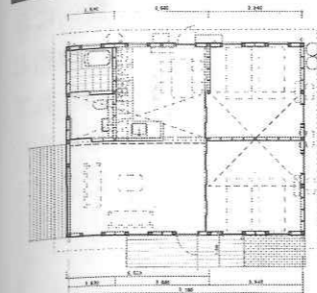


図2. 平成ハウスの1号

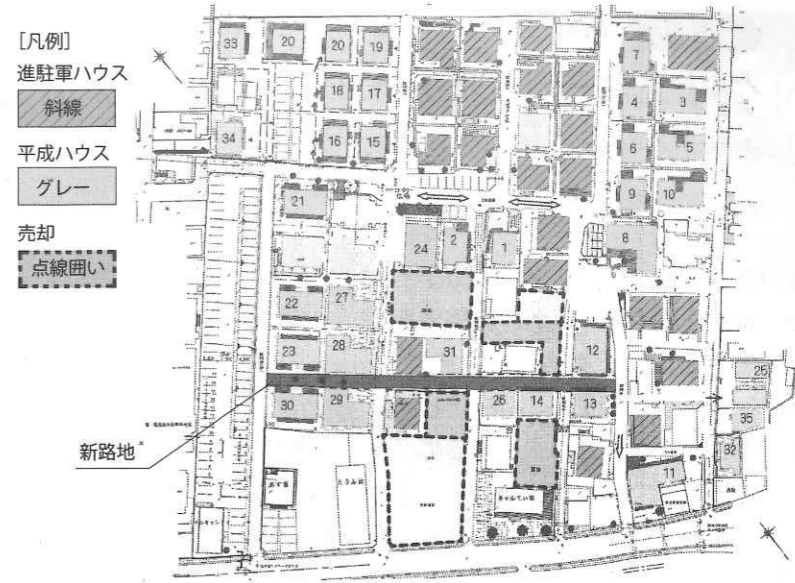


図3. 配置図

もある若者だった。若者は、音楽関係者の仲間に呼びかけ、ジョンソンタウン内にプロ用の録音スタジオを誘致し、何人かの仲間も居住者として招いた。

とりわけ、床材をやめ、床暖房を組み込んだコンクリートむき出しの床とするにはずいぶんと論議があった。結果的に玄関がない入り口とコンクリートの床は、大きな犬を飼い、お店にするのに好都合となった。

夏涼しく冬は暖かい。汎用性がありバリアフリー。これからの標準住宅には不可欠な要素とされた。

■新たなコミュニティの形成

タウンでは、施主、建築家、居住者、施工者が参加しアイディアが検討された。新たな店は、説得されて出店する場合もあった。回遊できるよう、街路も新設された(図3)。

当初、街道沿いに数件しかなかった店も、今は50軒を越えるまでになった。店は、多くのカフェ、小物、そして多くの犬関係のショップ、撮影スタジオ、録音スタジオ、写真館、歯医者、家具ショップなど。

青空市も定番化してきており、その度に大勢の人々がまちにくる。

タウンでは、屋間でも男性同士の井戸端会議が路上で開かれる。居住者のバギーカーにまちの子供たちが飛び乗り、運転手はレストランに招

待する。タウン内で引っ越す時にはタウン内の仲間が手伝う。タウン内で作曲、録音、デザインされたCDもできた。居住者がつくる花束がタウン内のお店で販売される。録音スタジオには、有名な音楽家が来る、撮影スタジオでは屋外でもモデルの撮影が行われる。まち全体を使った映画やドラマも撮影された。

そして音楽関係者、犬愛好家、デザイン関係、文筆家、子育て中の家族など、共通な価値観を持つ人同士のコミュニティがいくつもできた。

当初、子供の姿はなかったが、今は子供が沢山いる。海外からの居住者、そして、バリアフリーのまちに障害者も住まうようになった。最初の「安心安全タウン」などの福祉のまちが実現したと言っているかも知れない。

■創造的かつ活発なコミュニティはなぜできたのか?

便利な都市部では、自然発生的なコミュニティはできない。このまちではクリエイティブで若い家族が多い。コミュニティができた理由がいくつか挙げられる。

- ・まちづくりの主旨をあらかじめ公表した
- ・若くて子供が小さい家族が多い
- ・借家をお店とできかつ、内装が自由に変えられ、自由な自己表現を

- 許した
- ・住みながら職場をつくれる
- ・居住者を希望する人々は、磯野商会とよく面談する、また誘われて居住者になるケースも多い
- ・子育てがしやすい
- ・大きな犬が飼える(1階のリビングが広く、床がコンクリート)
- ・玄関がない
- ・南側に大きな公園がある

ジョンソンタウンでは、大きな犬を飼い、仕事をし、隣接する公園で子供と自然とサッカーを楽しみ、家の前の芝生でコーヒーを飲む。誰もが夢に描く、家族と楽しむ時間が実現されている。子育てがしやすく、障害者や高齢者にもやさしいので、いつまでも気の置けない仲間とともに楽しく住める。

新たな居住者によって、文化的でクリエイティブな活発なコミュニティが生まれたことは確かである。現代において、特異で活発な交流ができたジョンソンタウンはまちづくりのヒントを与えてくれる。

参考文献:

1. 小泉和子編「占領軍住宅の記録(上)」住まいの図書館出版局 1999

補注:

1) 元ジョンソン基地の通訳かつ住宅専門に勤めていた、谷豊氏からのヒアリング
2) 磯野商会はキリンビールの創設者として歴史に名前が出てくる。隣接する公園は同会社所有だったが農地改革で買取されたもの